

特 2

456

訂正  
觀世流強内百拾番

東討骨我

106



夜討曾我

以才四人... 其名も高き富士の根乃ぐく

其名も高き富士の根乃ぐく

其名も高き富士の根乃ぐく

其名も高き富士の根乃ぐく

其名も高き富士の根乃ぐく

其名も高き富士の根乃ぐく

其名も高き富士の根乃ぐく





夜言

急ナシのきよきよとて海へまき古錦

と思入の程のゆく敷上言あふりて神と

神官のゆく垣根の宮へうのたの

げに教花の名跡き下我前下

やきかたり下富士のまき下瑞下のまき下

きりく下急下程下のまき下きり下

乃きき好まて人びるの時実の急

ま前よ幕十郎のほくまき人又言きり下

いかに時宗へうは始りあはる中あれた

我思のし職をのちてたさのゆる

あふら幕のゆる目と急のゆる

有横をていのか程よ多まき人の中よ

我兄弟の幕の内程おはひる公

ま又言いし人今よ始り思のし職を

使附

二











まゝに 世上の妻謀りごとく扱も  
 我より親のうきよめを彼に経て今  
 此後討かまはれ討くはあり兄弟を  
 布成あつた越後の母歎言給てんや  
 何れも痛りくは程の志あはく  
 と持て二人あつた故郷へゆくは  
 是の思ひもよめは寝てはおは

馬きもは意よとてよるは月  
 ちかやもはし馬ちよまらる兒  
 かきて討死はくま為めて結ん  
 けは後人の世氣よたいては  
 婿さまらるる鬼まらるるお  
 まらる中ラニのものをとて結ん  
 何れも討かまはれ討くはあり兄弟を











討我ら名第を〜あつた扱ふ

は〜ま〜母は形も〜

お〜教わりの随ふ君臣の礼

と〜ある是を突すは母を〜

三母まへの勤當と 上青〜

宣入の〜鬼王國之郎は〜

〜聲の下よきも〜

下〜クリ地〜

〜あ〜れ人の〜

〜た〜は唐土の樊噲が母の夜

〜ま〜ある〜

今當代の弓矢は〜

〜物〜賜き〜

〜あ〜ねた恩愛の契り〜

〜あ〜そのあ〜







此月も入相の鐘もたも辨わかるる諸行  
 無常とつき續つけらるようきき  
 つつひひ波なみたらのの卷まめめ具ぐままややるる  
 文ふののひひぬぬままよよととええいいきき人ひとののふふままてて  
 今更思いまひひ志しるる雲くもののかかるる也や富とみ土つちははすす  
 下野しもよりり管くだ我われはは弟あにももままささ  
 人ひとのの節ふしももたたららぬぬてて啼なぐぐららぬぬ

羨うらやまちちよよくく 乃なのの勢せきかかままててらら白しろ  
 波なみのの音ねたたくく 固かたとと作つくららししめめききるる  
 上かみああららむむのの軍いくさ兵へいややああししめめええ  
 弟あにううそそととてて多おほくくれれ執とつつハハ強つよききああひひ  
 へへてて愛あいささささいいめめららるるもも十じ席せき  
 故ゆゑくく行ゆくくてておおははららすす事ことああららまますす  
 十じ席せきのの膏あぶらのの新あらた田たのの雲くもとと戦いくさのの音ね



しるおのち討て給ひたるよあ口借

や志のた骸と一可とらる思ひ

お思ひ書け華屋敷とよあつて愛取

よ骸とらるる母会やあ上房味方の

勢ハ是をまてウケおらる物のづか

くつらき時字と目下かまてかろり

上上意おもひもたのまてウケくさる

手の三つる疾人物をと太刀取あり

たつさる親父ほめ人下をありきれ

か中らるる庭下の下ちかみある

屋立下昂下焚下會下り下噴下り下と下あ下張下席下り下杖下

術を垂つて五郎下かたて下まま下つて

か下れ下討下字下も下が下あ下る下め下いた下れ

太刀忠志のまをまきつて志り下り下程下の







あり重あつて子筋の繩を掛まゝも  
 びりきりくそ君乃所前より  
 之行ふるがたきれ

夜言

右之本者觀世大夫織部以章句  
真本令放行畢

天保十一庚子歲孟春改正再板

皇都二条通御幸町西江入町

山本長兵衛



明治廿六年二月十七日印刷  
 明治廿六年二月同日訂正出版  
 明治廿六年三月廿九日別製本御届

定價三錢五厘

東京市麹町區飯田町四丁目吉番地  
宮内省御用達

訂正者 觀世清廉

發行所 京都市上京區二条通御幸町栗原  
發印者 檜常之助

板權 所有





